

一 次の傍線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① ゼイキンの種類について学ぶ。
- ② 何事も、キホンを大事にしなければならない。
- ③ アンパンマンは、セイギの味方だ。
- ④ ドウトクとは何かを考える。
- ⑤ トウブンの取りすぎに注意したい。
- ⑥ 初の女性大統領がタンジヨウした。
- ⑦ 交通事故にあい、シンバイ停止におちいった。
- ⑧ ギユウニユウを飲んで健康になろう。
- ⑨ 先生が、席順にしたがって、クラスをハンに分けた。
- ⑩ 私の祖父は、シヨウグンだった。

二 次の慣用句の空欄に当てはまる自然に関する言葉を漢字一字で答えなさい。

- | | |
|------------------------------------|---------------------------------|
| ① <input type="text"/> 上に置けない | ② <input type="text"/> 千山千 |
| ③ 他人の <input type="text"/> 似 | ④ 付和 <input type="text"/> 同 |
| ⑤ <input type="text"/> とすっぱん | ⑥ <input type="text"/> 行きがやすい |
| ⑦ <input type="text"/> の字に寝る | ⑧ 湯 <input type="text"/> のように使う |
| ⑨ <input type="text"/> が降ろうが槍が降ろうが | ⑩ <input type="text"/> の数ほどいる |

三 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問いでは、句読点やカギカッコも一字に数えます。)

科学者の誕生

今日の社会のなかでは、科学者という存在はごくありふれている。むしろ、その存在がないということ自体が考えられない。 A 、今から一五〇年前には、科学者と呼ばれる人々の数は、数えるほどだったし、二〇〇年前には、皆無だったと言ってよい。という、直ちに反論があるかもしれない。ニュートンは「科学者」ではなかったのか、ガリレオ（一五六四―一六四二）は、コペルニクス（一四七三―一五四三）はどうか。ニュートン（一六四二―一七二七）が死んだのは一七二七年のことである。今から二五〇年あまり前のことだ。しかしニュートンは「科学者」と呼んでよいのではないか。私は、①その反論には「ノー」と答えたい。

#1

何故ニュートンは科学者ではないのか。理由の一つは簡単である。ニュートンはイギリス人であるが、彼は英語で「科学者」を意味する《scientist》という言葉で呼ばれたことは、生涯一度もなかったことが判っている。《scientist》という単語が英語のなかに登場したのは、一八四〇年ころのことで、ニュートンが死んでから一〇〇年以上経っている。そういう呼び名がなかったということは、その名で呼ばれる実体も存在しなかったということの意味するし、そうだとすれば、ニュートンの時代には「科学者」と呼ばれるべき実体はこの世に陰も形もなかったと言つてよいはずである。

#2

この話はいろいろな方向に広がる可能性をもっている。まず、それではニュートンは一体何者だったのだろうか、という問があるだろう。それにも比較的簡単に答えられる。彼は哲学者であつた。もつとも、ここでは多少の注釈が必要になる。②ここである「哲学者」と、われわれが今日その名で呼ぶ存在との間にはかなりの距離がある。ニュートンが哲学者であつたという時の「哲学者」とは、言葉本来の意味での「philosopher」である。言い換えれば「愛知者」である。ただここでの「知」すなわち《Sophia》は、ギリシャでのそれとずれをもっており、キリスト教的背景を強く持ったものであつた。つまりニュートンの「愛する知」というのは、キリスト教的な神学に裏打ちされた「知」であつた。

なるほどニュートンは、現在の概念系に照らせば「物理学」に近いことも研究していた。しかし、彼はまた聖書についても、大変熱心な研究家であつた。彼は、自分の神学的立場から見て、いわゆる三位一体論に強い疑問を抱いていた。アタナシウス（五世紀の神学者）が捏造した聖書の章句によつて、後代の人々はだまされているのであつて、キリストの立場からすれば三位一体論は誤りであるということの証明に、彼は情熱を傾けていた。

B 彼は、考古学的な研究にも多くの時間を注いだのだつた。しかし大切なことは、そのようなニュートンの知的活動は、現在では稀にあるような、物理学者がホビーで考古学を勉強したり、あるいは聖書神学に（a）手を染めるということとは全く違つていたということを理解しなければならない、という点である。考古学を勉強するのも、旧約聖書のなかに現れる様々な「歴史的」事件（例えばノアの洪水のような）が、正確に何時起こつたのかを、地質の特徴から推定できると考えたからであり、また彼の「物理学」的と見える仕事も、神がこの世界をどのように創つたのかを理解しようとする営みとして行われたものであつた。

C 現在の科学者と呼ばれる人のなかにも、個人的にはキリスト教信仰を持つている人がいるだろう。その人が、自分の自然探求の目標は、神の被造物であるこの世界をよりよく神の意志に沿つて理解す

るためだ、と思うことはないとは言えないだろう。しかし、現在の科学は、そのような前提から X されることをむしろ薦めるのであり、少なくとも「科学」がそのような神学的な自然解釈を共有しなければならぬと考へている人はいないはずである。しかし、ニュートンの時代には、ということとは当然ガリレオやコペルニクスの時代においても、ということになるが、彼らの知的活動の本質が、まさにそのような「神学的」な立場からなされるところにこそあり、それを除いては知識が成り立たないという確信が、知識人を束縛していた。したがつて、彼らのやつていたことは「科学」ではなく、また彼らは「科学者」ではない、ということとは、それほど奇矯なことではないのである。

科学者とは何か

D 、ガリレオやニュートンのやつていたような知的活動が、「科学」へと変化する過程では、少なくともキリスト教的な自然理解の枠組みから、知的営為が解放されることが不可欠であつた。その解放過程があつて初めて西欧の知は、「科学」という伝統を新たに創造するのである。私はこの解放過程をかつて「聖俗革命」と名付けたことがある。

次に留意すべきなのは、一九世紀の四〇年代に、では「科学者」（あるいは、彼らが行う知的営為としての「科学」そのもの）が誕生したとすれば、その当時「科学」や「科学者」は、社会からどのように扱われたか、という問題である。その点で面白いエピソードがある。トマス・ハクスリ（一八二五—九五）と言え一九世紀後半のイギリスきつての知識人であり、またダーウィンの進化論の強力な擁護者であつたことから考えれば、当然われわれの感覚では「科学者」の仲間と言つてよいように思われる人物であるが、③そのハクスリは、英語としての《scientist》という言葉に我慢ならなかつたという。彼は、この新造語を聞いた

ときに、このような言葉を造ったのはもの知らずのアメリカ人に違いないと毒づいたし、一八七〇年代に、今度はある会で自分が《scientist》と紹介されたときには、自分はそう呼ばれることを拒否すると抗議したという話も伝わっている。ハクスリはどうしてそれほどこの単語が気に入らなかったのであろうか。

その第一は、この語の造語法から来るものと想像できる。というのも《scientist》は、言うまでもなく《scient + ist》という形に分解できるが、この二つの語の連結は、英語の語法に逆らうものという印象を生み勝ちであったと思われるからである。そもそも《is》は、むしろ「人」を表すが、そればかりではない。《dentist》^{※6}、《pianist》^{※7}、《physician》^{※7}、《musician》と比べてみれば一目瞭然のように、《ist》の前に置かれる名詞は、非常に狭い概念であるのが通例である。言い換えれば、《is》とは、「何かを専門的、職業的にやる人」である。ところが、《scientist》の場合、《ist》が受けている名詞の《scient》は、もともと「知識」を意味するラテン語であって、英語や仏語で用いられる《science》^{サイエンス}も永らく「知識」の意味であったことから判るように、非常に大きな、広い意味を持っていた語と言える。そのことを知っていれば（そして当然、当時のイギリス知識人はハクスリも含めて、そのように理解していたはずである）、《scient + ist》という造語の方法が「もの知らず」に受け取られたろうし、言葉としても（b）^{かん}に障るものであったことは容易に推測できる。

もう一つの問題は、その概念そのものにある。ヨーロッパ、とりわけイギリスでは、知識を「専門的・職業的」に取り扱うことに対する反発は、極めて強かったし、その傾向は今でも一部に残っている。「アマチュア」つまりは「そのことを愛しているからこそやる人」こそ、「愛知者」であるとすれば、「知識」を「飯の種にする」と受け取れるような語感と意味とを備えた《scientist》という語が、知識人一般から反発を買ったのも判らないわけではない。

【中略】

ところで、では、この語を造った人物、すなわちW・ヒューエル（一七九四—一八六六）は、こうした点を理解していなかったのだろうか。やはり当代きつての知識人だったヒューエルは、それらのことは百も承知だったと考えられる。④それでおヒューエルは、《scientist》という語を鑄造したのだった。第一に、ヒューエルにとって、ということは、当時の敏感な知識人の一部にとっても、《science》という単語は、一八四〇年前後には、かつての歴史的な「知識全般」を指すような、大きく広い用法からずれ始め、知識のなかでも極く特殊で特別な性格を持ったもの、すなわち、現在われわれが「科学」と呼び、英語で《science》と呼んでいるものに近い内容を備えるようになりつつあった。またそのことは、ヨーロッパにおける「知識」の内容が、伝統的なあの「哲学」から変質を遂げ、そこから新しい「科学」と呼ぶべき特殊な知識が、ようやく姿を現してきていたことをも同時に意味している。

（村上陽一郎『科学者とは何か』
（問題作成の都合上、表記を改めたところがあります。）

- ※1 scientist英語で「科学者」の意。
- ※2 philosopher英語で「哲学者」の意。
- ※3 捏造事実でないことを事実のようにこしらえて言うこと。
- ※4 ホビー「趣味」の意。
- ※5 奇矯言動がふつうとちがっていること。
- ※6 dentist英語で「歯科医」の意。

※7 フィジシャン physician……英語で「医師」の意。

※8 ちゅうぞう 鑄造……ここでは、「造り出すこと」の意。

問一 空欄

A	・	B	・	C	・	D
---	---	---	---	---	---	---

 に当てはまる語句として最も適切なものを次

の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア また イ しかし ウ 言い換えれば エ もちろん

問二 波線部 (a) 「手を染める」、(b) 「かんに障る」の語の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

(a) 「手を染める」

ア ある物事をしはじめる。

イ 悪いことをはじめる。

ウ 慣れないことをする。

エ 物事を変化させる。

(b) 「かんに障る」

ア くやしい。

イ 気に入らない。

ウ うれしい。

エ さみしい。

問三 傍線部①「その反論には『ノー』と答えたい」とありますが、その理由を、

#1

 から

#2

 の部分に書いてある内容を元に簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部②「ここという『哲学者』とは、どのような者ですか。三十字以内で説明しなさい。

問五 空欄

X

 に当てはまる語として最も適切なものを本文中から探し、漢字二字で抜き出しなさい。

問六 傍線部③「そのハクスリは、英語としての《scientist》という言葉に我慢ならなかったという」とありますが、その理由について述べた次の文の中から、適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 《set》の前に置かれる名詞は、狭い概念であるのが通例であるにも関わらず、《scient》(知識)という、広い意味の言葉がその前に置かれていたから。

イ ヨーロッパでは、知識を「専門的・職業的」に取り扱うことに対する反発が極めて強く、「知識」を「飯の種にする」と受け取れるような語感と意味とを備えた《scientist》という語に反発を覚えたから。
ウ もの知らずのアメリカ人が造ったと思われるでも仕方ないほどに、《scientist》という語は、当時の造語法の規則から外れており、その語を認めたくなかったから。

エ 《dentist》《pianist》等と同列に《scientist》である自分が扱われるのは、イギリスの一流知識人であったハクスリには我慢ならなかったから。

問七 傍線部④「それでおヒューエルは、『scientists』という語を鑄造したのだった」とありますが、それはなぜですか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 当時の西欧では、『science』という語は、知識全般を指すものではなくなっていたが、ヒューエルは、強引に新たな語を造ろうとしたから。
- イ 当時の敏感な知識人の一人だったヒューエルは、神学とは関係のない、大きく広い用法を意味する『science』という語の必要性を感じたから。
- ウ 現在われわれが科学と呼び、英語で『science』と呼んでいるものが出現し、伝統的な「哲学」が変化してしまったから。
- エ 当時のヨーロッパでは、『science』という語が、非常に狭い概念を表すようになりつつあり、ヒューエルが、それに合わせて語を造ったから。

四 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。(字数制限のある問いでは、句読点や力ギカッコも一字に数えます。)

あるくもった冬の日暮れである。私は横須賀発上り二等客車のすみに腰をおろして、ぼんやり発車の笛を待っていた。とうに電灯のついた客車の中には、めずらしく私のほかに一人も乗客はなかった。

X

私は外套のポケットへじつと両手をつつこんだまま、そこにはいつている夕刊を出してみようという元氣さをおこらなかつた。

が、やがて発車の笛が鳴った。私はかすかな心のくつろぎを感じながら、後ろの窓枠へ頭をもたせて、①眼の前の停車場がずるずると後ずsりを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたたしい日和下駄の音が、改札口の方から聞こえ出したと思うと、間もなく車掌の何か言いのしる声と共に、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、②十三、四の小娘が一人あわただしく中へはいってきた、と同時に一つずしりとゆれて、おもむろに汽車は動き出した。一本ずつ眼をくぎっていくプラットホームの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに祝儀の札を言っている赤帽——そういうすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後ろへ倒れていった。私はようやくほつとした心もちになつて、巻煙草に火をつけながら、はじめて懶いまぶたをあげて、前の席に腰をおろしていた小娘の顔を一瞥した。

それは油気のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでのあとのあるひびだらけの両頬を気持ちの悪

いほど赤くほてらせた、いかにも田舎者らしい娘だった。しかも垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻がだらりと垂れさがったひざの上には、大きな風呂敷包みがあった。そのまた包みを抱いたしもやけの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしっかりと握られていた。私はこの小娘の品な顔だちを好まなかった。それから彼女の服装が不潔なものやはり不快だった。最後にその二等と三等との区別さえもわきまえない愚鈍な心が腹立たしかった。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいという心もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然とひざの上にひろげてみた。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、とつぜん電灯の光に変わって、刷りの悪い何欄かの活字が意外なくらいあざやかに私の眼の前へうかんできた。いうまでもなく汽車は今、横須賀線に多いトンネルの最初のそれへはいったのである。

しかしその電灯の光に照らされた夕刊の紙面を見わたしても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ちきっていた。※第一次大戦の講和問題。講和問題、新婦新郎、瀆職事件、死亡広告——私はトンネルへはいった一瞬間、汽車の走っている方向が逆になったような錯覚を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へほとんど機械的に眼を通した。が、その間もちろんあの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたようなおももちで、私の前にすわっていることをたえず意識せずにはいられなかった。このトンネルの中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうしてまたこの平凡な記事にうずまわっている夕刊と、——これが Y でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなつて、読みかけた夕刊をほうり出すと、また窓枠に頭をもたせながら、死んだように眼をつぶつて、(a) うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、いつの間にか例の小娘が、向こう側から席を私の隣へ移して、しきりに窓を開けようとしている。が、重いガラス戸はなかなか思うようにあがらないらしい。あのひびだらけの頬はいよいよ赤くなつて、時々鼻涙を

すすりこむ音が、小さな息の切れる声と一しよに、せわしく耳へはいつてくる。これはもちろん私にも、幾分ながら同情をひくに足るものには相違なかった。しかし汽車が今まさにトンネルの口へさしかかろうとしていることは、暮色の中に枯れ草ばかり明るい両側の山腹が、間近く窓側に迫ってきたのでも、すぐに (b) 合点のいくことであつた。にもかかわらずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下ろそうとする、——その理由が私にはのみこめなかった。いや、それが私には、たんにこの小娘の気まぐれだとか考えられなかった。だから私は腹の底に依然として険しい感情をたくわえながら、あのしもやけの手がガラス戸をもたげようとして悪戦苦闘するようすを、まるでそれが永久に成功しないことでも祈るような冷酷な眼で眺めていた。すると間もなくすさまじい音をはためかせて、汽車がトンネルへなだれこむと同時に、小娘の開けようとしたガラス戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶かしたようなどす黒い空気が、にわかに息苦しい煙になつて、もうもうと車内へみなぎり出した。元来のどを害していた私は、ハンケチを顔に当てるひまさえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、ほとんど息もつけないほど咳きこまなければならなかった。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛をそよがせながら、じつと汽車の進む方向を見やつている。その姿を煤煙と電灯の光との中に眺めた時、③もう窓の外がみるみる明るくなつて、そこから土の匂いや枯れ草の匂いや水の匂いが冷やかに流れこんでこなかったなら、ようやく咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしにしっかりとついても、また元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである。

しかし汽車はその時分には、もうやすやすとトンネルをすべりぬけて、枯れ草の山と山との間に挟まれた、ある貧しい町はずれの踏切りに通るかかつていた。踏切りの近くには、いずれも見すばらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであるう、ただ一旗のうす白い旗が懶げに暮色をゆすつていた。やつとトンネルを出たと思う——その時その蕭索とした踏切りの柵の向こうに、私は頬の赤

い三人の男の子が、目白押しに並んで立っているのを見た。彼等は皆、この曇天どんてんに押し※くもり空すくめられたかと思うほど、そろって背が低かった。そうしてこの町はずれの陰惨いんさんたる風物※陰気でむじいと同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのをあおぎ見ながら、いっせいに手をあげるが早いか、いたいいけなのどを高くそらせて、何とも意味のわからない喊声かんせいを一生懸命にほとばしらせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出していた例の娘が、あのしもやけの手をつとのぼして、勢いよく左右に振ったと思うと、たちまち心をおどらすばかり暖かな日の色に染まっている蜜柑みかんがおよそ五つ六つ、汽車を見送った子供たちの上へばらばらと空から降ってきた。私は思わず息をのんだ。そうして刹那せつなに一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公ほうこう先へおもむこうとしている小娘は、そのふところに蔵くらしていた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労ろうに報むくいたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声をあげた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落らんらくするあざやかな蜜柑の色と――すべては汽車の窓の外に、またたく暇ひまもなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ないほどはつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、ある得体の知れないほがらかな心もちがわきあがってくるのを意識した。私は昂然こうぜんと頭をあげて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視ちゅうしした。小娘はいつかもう私の前の席にかえて、あいかわらずひびだらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻にうずめながら、大きな風呂敷包みを抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。……………

④私はこの時はじめて、いいようない疲勞と倦怠とを、そうしてまた不可解な、下等な、退屈な人生をわずかに忘れることが出来たのである。

(芥川龍之介「蜜柑」)

(問題作成の都合上、表記を改めたところがあります。)

問一 波線部 (a)「うつらうつら」、(b)「合点のいく」の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ

選び、記号で答えなさい。

(a)「うつらうつら」

ア 熟睡しきっている様子。

イ 浅い眠りに引き込まれている様子。

ウ 寝たくないのに寝てしまう様子。

エ 目が覚めているのに目をつぶる様子。

(b)「合点のいく」

ア つじつまが合う。

イ 点を結べる。

ウ 予想通りになる。

エ 納得できる。

問一 空欄 には、次の三つの文が入ります。これを正しく並びかえて、その順番を記号で答えなさい。

ア 外をのぞくと、うす暗いプラットホームにも、今日はめずらしく見送りの人影さえあとを絶って、ただ、檻おりに入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、ほえ立てていた。

イ 私の頭の中にはいいようなない疲労ひろうと倦怠けんたいとが、まるで雪ぐもりの空のようなどんよりした影を落としていた。

ウ これらは、その時の私の心もちと、不思議なくらい似つかわしい景色だった。

問三 傍線部①「眼の前の停車場がずるずると後ずさを始める」とは、どういうことですか。簡潔に説明しなさい。

問四 傍線部②「十三、四の小娘」とありますが、「私」は彼女のどのような点を気に入らなかったのですか。適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア けたたましい足音を立てて、二等室の中に入ってきた点。

イ 両頬に横なでのあとがあり、そこがひびだらけで気持ち悪いほど赤くなっている点。

ウ 垢じみた萌黄色の毛糸の襟巻を、だらりと垂らしている点。

エ 三等の赤切符を持っていながら、二等室に入ってきた点。

問五 空欄 に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 幻想げんそう

イ 終点

ウ 実体

エ 象徴しょうしよく

問六 傍線部③「もう窓の外がみるみる明るくなって、そこから土の匂いや枯れ草の匂いや水の匂いが冷やかに流れこんでこなかったなら、ようやく咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしにしっかりとつけてでも、また元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかったのである」とありますが、ここからわかることとして適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 汽車はトンネルを抜けた。

イ 私は小娘をしからなかった。

ウ 窓はすぐにしまった。

エ 私の咳はやんだ。

問七 傍線部④「私はこの時はじめて、いいようなない疲労と倦怠とを、そうしてまた不可解な、下等な、退屈な人生をわずかに忘れることが出来たのである」とありますが、「私」がそのような状態に至ったのはなぜですか。「私が見た光景」にふれながら、百字以内で説明しなさい。

問八 本文について説明した文として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 汽車の中で出来事を、「私」の当時の印象の強さに従って、過去や現在を行き来しながら自由に描いている。

イ 「私」が抱いていた、小娘に対する不快感は、小娘の見た目や言動はもちろん、においや声にも起因したものである。

ウ 「くもった冬の日暮れ」、「枯れ草」、「しもやけの手」等、暗く冷たい印象の風物であふれた世界の中、蜜柑は際立って暖かな色のものとして描かれ、物語に少しの明るさを与えている。

エ 不可解で、憂鬱で、退屈な人生を送っていることに悩んでいた「私」だったが、娘との出会いによって、これから徐々に人生を好転させていくことがほのめかされている。

問題は以上です。

